

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

ホワイトプリズンⅣ

清き星月は肉人形の宴に沈む

小説 黄 支 亮

挿絵 松沢 慧

序章：姦毘

006

第一章：女王搜索隊

028

第二章：責め苦

078

第三章：無残な朝

134

終幕

230

登場人物紹介

Characters



ヴァネッサ

神官戦士。神殿でも屈指の弓の使い手。きわめて男性的な性格で、よくいえば屈託がなく、悪くいえばがさつで柄が悪い。

アレクサンドラ（アレックス）

女神官。取り締まりのアレックスと呼ばれている。女王捜索隊の結成にあたってその隊長を務めることになる。

フィオ

亡き母親の再婚に伴ってクレイホーン男爵の義理の息子となった少年。神殿の保護観察を受ける身となった。

ポーラ

フィオの血の繋がらない叔母。

リディア

フィオの幼なじみで騎士見習いの少女。

マレーネ

辺境伯の令嬢。黒い髪の美女。

第二章 責め苦

月が再び大地の上を淡く照らす。その明かりを臉に受けて女は目を覚ました。

——ここは……。

女はそのように言った。言ったつもりであったのだ。だが女の唇から漏れたのはくぐもった呻き声だけであった。女の唇には鉄の輪が噛ませられてある。それだけではない。女は絵描きが使う画台に両手両足を固く拘束されていた。女の体を覆っているのはごわごわした麻布が一枚あるきり。それが払いのけられれば女はただちに生まれたままの姿になる。

——どうということなの、これは、私はいったい……。

惑乱する女の疑問はすぐに解消された。すべてを説明する導き手はその場に現れたからである。

「お目覚めかな、女神官殿……」

フードのついた小汚いマントを羽織った人物。顔は分からないが、声からすると中年から壮年といった感じだろうか。アレックスの額から冷たい汗が一筋流れ落ちる。

「どうかね、囚われ人の感想は。悪くないだろう？」

顔を見せない中年男は気味悪く笑った。

「自分に何をするのかと聞きたいようだな。教えてやろう……」
マントの男はそう言うのと軽く手を上げた。アレックスの左右で星の石のランタンによるぼんやりとした光が灯り、彼女の回りの様子が明らかになった。

アレックスは見た。自分の回りに十五台のイーゼルが並び、その一つ一つに素っ裸の女たちが括りつけられていた。両足を心持ち開き、後ろ手に縛られた裸の女たち。女たちは皆死んでいるように硬くなっている。マントの中年男は楽しそうに笑って言った。

「私は芸術家なのだよ。女の肉体をキャンパスとし、その肉体を恥辱の肉刀によって彫り上げる彫刻家……見るのだ」

マントの男は再び手を上げた。女たちの回りのランタンがさらに輝きを増した。

「おお……」

なんと破廉恥な。アレックス自身はそうのように言ったつもりであった。裸の美女たちの股間には奇妙なぶよぶよしたピンク色の細長い物体がぶら下がっていた。二股に割れた頭を持つ不思議な形をした気味の悪い果実。

「この湿地のどこでも手に入るヒルの仲間だ。もっとも血を吸うことはないが」

マントの男は楽しそうに説明した。

「牝の股間から嘔き出す蜜が好物なのだ。ああやって二つに割れた頭の一方で女の陰核に

吸いつき、もう一方を膣内に挿し込んで女の流す涙を啜っているのだ」

二つに割れた頭を持つ生き物は時々、ぶるぶると震えている。

「不思議な生き物だな。女たちが疲れて気を失うとああやって自分たちも眠るのだ。そして女たちが目覚めればまた活動を再開する」

汚いマントの男はそう言いながらアレックスのほうへと近づいてくる。

「心配するな。我らは女を殺したりしない。傷もつけない。何といっても我々の大事な仲間となり、子供を宿す母体であるのだから……」

アレックスは顔を強ばらせた。マントの男が何をしようとしているのかアレックスにも何となく察せられた。それは神殿のために身を捧げ、純潔を守り続けた女神官にとって死よりも恐ろしいことであつた。

「震えているな。心配いらぬ。ヒルの口が処女膜を破るようなことはない。神官殿はただ陰核の快感に身を任せればいいのだ」

マントの男がそれまでずっと握っていた左手を上げた。ピンク色をしたぶよぶよの生き物が女の目の前に突き出される。その生き物は海に暮らすホヤにも似ていたかもしれない。二つの口があり、その一方が吸盤のようになっていてる。

——そ、そんなものを、そんな汚れたものを……。

アレックスは全身に力を入れて、イーゼルの呪縛を逃れようと躍起になった。両手首と

両足首、そして首にベルトを巻かれた女は、しかし木枠から逃れることができない。傍目には貧弱で軽そうな木枠は、実際よりも頑丈であり、爪先立ちになっているアレックスがどれほど、そしてどのように力を入れても微動だにしなかった。女の努力は彼女の目的とはまったく別の効果を上げることになってしまった。

はらっ……。

汚い麻布が女の身悶えによって落ちてしまった。

「お、おっっ」

アレックスは喚いた。神殿に仕え、冷静で緻密な人物といわれた女神官も、いや、そういう人物であるからこそ、全裸でイーゼルに拘束されている姿を他人に見られることは耐え難い屈辱であったのだ。

「……美しい」

中年男はフードの下で笑った。男の言葉にはしかしそれほどのいやらしさが感ぜられない。それは彼が芸術家であるからかもしれないし、もっと別の理由があるのかもしれない。そう、何か他の理由が……。

「おっ、おっおっっ」

冷静なアレックスは恥も外聞もなく激しく喚いた。

見事な裸体であった。肉付きがそれほどよいというほうではなく、どちらかといえば瘦

せぎすだが、それだからといって貧相な体にはなっていない。乳房は小さめで、その先端の乳輪も小ぶりである。

「乳首が勃っているぞ、神官殿……」

男は笑って言う。と美女の乳首を指でくりくりと器用に転がす。上下左右、円を描くように。黒ずんだ乳首が男に弄ばれて踊る。

くりくりくり……。

「おぼおおつ、ぼーっ！」

女は叫んだ。指で弄ばれる乳首に電流のような感覚が走る。恥ずかしくすぐぐったく、そして……。

——駄目っ！ 駄目ーっ！

アレックスは恥辱のあまり気が狂いそうになっている。

——だめ、だめっ……。

男は乳首責めを決してやめようとはしない。女の頬が真っ赤に染まり、毛穴からは汗が陽炎のように昇り立つ。神官アレックスは素っ裸のまま、首から上を激しく左右に振る。黒い髪がまるではたきのようにして舞い、猿ぐつわと赤い唇の隙からは涎が飛び散る。

「おっ、おっーっ」

白い肌が震え、女の横隔膜の下がびくっ、びくくっつと痙攣する。アレックスの目はすで



に焦点が定まっていない。と、男の酷い乳首責めが不意に止まった。

「はあ、はあ、はあ……」

画台の上で伸び上がり、身をよじり、髪を振り乱しと激しい裸踊りを披露したことで女はすでに息が上がっている。だが。女にとつての本当の地獄はこれから始まるのだ。

「そろそろいいだろう」

マントの男はアレックスの活きのよさを十分に確かめたようである。前菜は終わった。次はスープが運ばれる番である。気味の悪い男はアレックスの前でゆつくりとかがみ込んだ。男の目の前には無駄な脂肪のない硬い腿があり、そして二つの腿の間にそれはあった。

「ふふふ、いい香りだ……」

マントの男は笑い、アレックスは悔しそうに歯を食いしばった。男の目の前には黒い茂みがあった。幅の狭い縦に長い楕円形をした恥毛の森。成熟した暗い森の奥にアレックスの最大の弱点であり、最悪の恥部が潜んでいた。

——姦淫こそは人倫を危うくする最大の原因。

信心深い母親に育てられ、そのように教えられたアレックスは、自分の一部、びらびらした肉の髪と、その内側に隠れたイソギンチャクにも似た肉の穴を激しく嫌悪していたのだ。

——こんなものがあるから、人はいつまでたっても苦しむのだ。

アレックスはそのように信じており、そこを触れることさえ忌み嫌っていた。

「ずいぶんと汚れているようだな、神官殿……」

男は笑いながら指で女神官の茂みの奥にある肉の割れ目をゆっくりと左右に押し開いた。

——そんなに、そんなに広がら……。

広がるわけがないとアレックス自身が信じていた女の割れ目が、彼女の考えとは裏腹に簡単に痛みなく広がっていく。

ぬああ……。

汚らしい肉色をした外側の襞を押し広げると、その中には湿った綺麗なサーモンピンクの粘膜が広がっていた。

——あ、あ、あ……。

美女は恐怖しながら自分の股間で起ころうとしている奇跡を見ている。襞が左右に展開され、内側に格納されていた陰核がぐぐつと飛び出してくる。

「ここ、ここ……」

マントの男は剥き出しになったアレックスのクリトリスを指でまさぐった。痛烈な痺れが女の股間を襲う。

「おっ、おっ！」

信じられないほどに強烈な感覚。イーゼルに括られた女は全身に力を入れて痺れるよう

な快感に耐える。

「自慰もしたことがないのか？ そんなはずはあるまい……」

マントの男はぐりぐりと剥き出しの突起をマッサージする。アレックスは髪を振り乱して絶叫した。

「うぼおおおっ！」

女の唇に押し込まれた鉄の輪の中心から透明な涎が糸を引いて飛び散った。

「感じているのだろう。我慢しないことだ……」

マントの男は嘲笑いながら入念にアレックスの陰核を揉みしだいた。

「指は使わなくても、無意識に股を擦り合わせて快感を得たことがあるのだろうか？ そうでなければ、こんなふうに快感を快感と味わうことなどないだろう」

男の言葉は神官の破廉恥な過去をえぐり出した。アレックスは真っ赤な顔をして首を横に振った。

—— 違う、違う、違う……。

当たらずとも遠からず。触ることを禁じられたその部分を擦ることによって自分の体がどうなるのかアレックスは知っていたのだ。経験をしていたからこそである。男は神官の弁解など聞かなかつた。言葉は語らずとも白い肉体は雄弁であったのだ。

「それぞれ……」

男は楽しそうにアレックスの茂みの奥をかき回した。女の裸足の爪先は苔の生えた地面の上でみっともないステップを踏んでいる。

くりくりくり……。

男は執拗にアレックスの一点を責め続けている。小さな肉の突起に血が集まり、硬く尖った先端を男は器用に擦り、揉み、かきむしる。男は女神官がもつとも感じるポイントがどこであるかを確実に心得ている。

「おぼおおっ、ごおおっ」

美女の白い顔が汗でかてかたと光り出す。女の決意と信仰に反して白い肌はどんどん熱を帯びていく。

「出てきた出てきた……」

イーゼルに括られた女の前でマントの男が笑った。アレックスの肉の割れ目は内側から透明なエキスをじんわりと噴出し始めていた。僅かに粘る恥ずかしいエキ스는厳格で禁欲的な神官のほつれた恥毛を濡らし始めている。

「ためらわずに女の性を受け入れるのだ」

男はそう言うときアレックスのクリトリスへの徹底的な責めを再開する。

「おおーっ！ ごおおっ！」

女は背筋を引きつらせ、弓なりに身体を反らした。汗が美しく散り、股間からは玉露が

噴出する。

——あ、あ、あつ、だめ、それ以上は……。神よ、私を……。ああーっ！

女の頭の中を巡る思考はすでに文章になつていない。男はそんなアレックスを無慈悲にしかし華麗に翻弄する。

くりくり……。きゅつきゅつ……。

硬く尖った快感を味わうためだけにあるその器官を男は丹念に丹念に揉みほぐしていく。アレックスは木の枝にかけられたモズのはやにえとなつたカエルのように両膝をかくかくと左右に開閉している。破廉恥極まる裸踊り。だが、それをしなければ女はすでに地上にしがみついていられないのだ。

「よいステップだ。神官にしておくには惜しい……」

男はマントの下で笑つた。アレックスの脳はすでに快感で満たされており、男の嘲笑が聞こえていない。

「おっ、おっ、おーっ！」

女は汗まみれになつて泣き喚いた。

——駄目、駄目、駄目……。

と。不意に男の責め手が止まつた。情けをかけてもらつた……。わけではない。男はアレックスの下半身が十分に暖まつたと判断したのだ。荒い息をしていたアレックスのぼんや

りとした眼差しがそこでかっと見開かれた。自分の白い肌を押される恥辱の烙印が、美女の目の前に突きつけられていた。

「そろそろこれの出番だ。早く吸わせるとこんなにいきり立っている……」

マントの男の手には汚れたピンクのぶよぶよが握られている。早く蜜を吸わせろ。気味の悪い二つ口のヒルはアレックスの肉の割れ目から噴き出す淫らなエキスの匂いに興奮しぶるぶるとのたくっている。

——それ、それだけは……。

アレックスは鼻の下を伸ばし、目を見開き、恥も外聞もないまま汗で光る顔を左右に振った。そして男は、アレックスが拒絶するからこそその割れ目に痛烈な一撃を浴びせることを決めたのだ。

「楽しみたまえ。女の身体に害になるようなことはない。ただちよつと気持ちのいい悪戯をするだけのこと」

男はピンクのぶよぶよを女神官の剥き出しの股間に押しつけた。気味の悪いぶよぶよは二つある口の一方をきゅつと広げると、女の陰核に食らいついた。

——うっ！

美女の身体の中を稲妻が駆け抜けていった。それは驚くほどに鮮烈で痛烈な一撃であった。ヒルは硬直している女の肉の割れ目にもう一方の口をにゅるつと挿し込む。

アレックスの黒い茂みの中にある女陰に、他の女たちと同じ汚れた烙印が押された瞬間であった。二度と消すことのできない汚点。再び戻れぬ快樂地獄への扉が無理やりにこじ開けられたのだ。

「お、おおっ……」

アレックスは泣くような顔のまま、全身を硬直させ、天を見上げる。神は信仰厚い女を救ってはくれなかった。

「たっぶり楽しみたまえ……」

男は笑い、アレックスのもとから離れると、すぐそばで女神官が天上から地獄へと転がり落ちていく様を観察し始める。

「神官殿。どうせだからゲームをしよう。もしもヒル責めを耐え、神官殿が絶頂を免れたら、あなたを解放してさしあげよう。どうか？」

アレックスは男の言ったことを理解できていない。それどころではないのだ。女の股間では忌むべき無残な光景が繰り広げられていた。

ふちゅ……くちゅ……

ピンク色をした醜い小さな命が女の勃起したクリトリスをその口でもって吸い始めた。

「お、おおーっ！」

明るい月の光と星の石のランタンに照らされた女が激しくおののいた。汚れた生き物は

女の蜜を絞り出す。クリトリスを締めつけ、刺激し、性欲を忌み嫌った女が長年に溜め込んだ膺蜜を無理に吐き出させようとする。それは全裸の女神官にとってあまりにも無慈悲な仕儀であった。

快感。それも純粹な快感。ヒルはクリトリスを巧みに吸い続ける。充血し勃起したアレックスの陰核にはヒルのおしゃぶりはあまりにもツボにはまりすぎていた。

「ごおっ、おーっ」

女の割れ目から噴出する透明なエキスの量が驚くべき勢いで増えていく。ヒルはその蜜をもう一方の口でもって吸い続ける。

「夢見心地。もう駄目かな？ 神官殿。情けないぞ」

マントの男は笑った。アレックスは涙を流して身悶えする。認めたくないが、そのような恥辱は女神官にとって確かに快感と感ぜられるものであったのだ。しかも、その低劣極まる快楽は女の子宮内でぐんぐんと膨らんでいくのだ。そう、まるで風船のように。

「おおーっ！ おーっ！」

悲しすぎる女の性。アレックスは自分がどんなに取り澄まし、神の愛を語り、修業に勤しんでも結局は獣欲からは逃れられないのだということを思い知らされたのだ。それも一匹の汚れたヒルによって。

「ためらうことなく上りつめるのだ」

マントを着けた男が厳かに言った。女は内股になり、がに股になり、みつともないダンスを踊って最後まで股間を守ろうとする。だが、それも無駄であった。女が子宮の中に閉じ込めてきた女の業、真つ白い風船は驚くべき勢いで成長していく。

きゅきゅきゅつ……。

ヒルの口が無慈悲に軽快にアレックスのクリトリスを吸う。もう限界であった。限界であったのだ。ついにその時がやってきた。恐ろしい欲望の決壊が。

「！」

女の両目がかつと見開かれた。牝の業の開花にアレックスは絶叫という産声を上げる。

「おお、おーっ！」

陰気な湿原の中、美女の肉の割れ目の奥に光が生まれた。理性で抑えることができない純粹な悦び。まるで暗夜に輝く稲妻のように美女の膣内で欲望が裂けて散った。

「おおーっ、おーっ、おーっ！」

女は身体をまるで石像のように硬くした。両腕、両足、背筋、腹筋。すべての筋肉が凍りつく。女はまるで海から天に向かって飛び上がるイルカのようにして女悦の空を舞った。そして次の瞬間、糸が切れた操り人形のように女の全身から力が抜けていく。

女が絶頂を愉しんだことを認識したのだろう。そこでヒルの動きが止まった。

冷たいアレックスの身体は見事に芯から燃え上がり、欲望の炎に焼き尽くされ、灰とな



った。

「はあ、はあ、はあ……」

女は固く目を閉じたまま荒い息をしている。女の左右のまなじりから涙が流れ落ちた。それは悲しみの涙でもなければ怒りの涙でもない。屈辱のそれとも違っていた。女神官自身は自分が泣いていることに気がついていない。男は笑った。

「上りつめたようだな……」

女神官は己の肉欲に負けてしまったのだ。夜とはいえ屋外で全裸に剥かれ、陰核をヒルに吸われて頂点に達してしまふ。あまりにも屈辱的な敗北であった。だが、絶頂直後のアレックスの顔はひどく穏やかなものであった。

「もっと愉ませてやろう。神官殿のご盟友がここに来るまで時間は十分にある」

アレックスはぼんやりとした眼差しを男に向けた。

ご盟友とはヴァネッサのことであろう。だが。アレックスは女の悦びに漬かりきった脳でぼんやりと考える。もしもヴァネッサがここに来て、事態は好転するだろうか。自分を誘拐し、かかる恥辱を与える相手と戦って勝てるのか。答えは語るべくもない。

——ヴァネッサ来ては駄目よ。ここに来ては……。

※

——偉そうに言っているながら、結局肝心なところで逃げるではないか。

人間、平素からあまり威張り散らすべきではない。ヴァネッサは自分の無慈悲な舌剣によつてその股間を焼くことになってしまったのだ。

「早く、下着を脱げ！」

ヴァネッサは女囚たちに高圧的に指示した。難色を示す女たちを前に、ヴァネッサは短刀の柄に手をかけた。

「脱げと言ったら脱ぐんだ！」

ひどい脅しに、ポーラが肩をすくめた。もうそうするしかない。女たちはそれぞれの衣服をずり下ろしにかかる。ポーラとマレーネは長いスカートを脱ぎ捨て、ショーツ一枚になった。リディアは膝まであるタイトなスパッツを脱ぎ捨てた。ポーラの赤いショーツ。マレーネの紫のショーツ、そしてリディアの水色のショーツ。三色の下着はそのどれもが夫との夜を愉しむためにきわめて小ぶりで、薄く、そして簡単にはぎ取ることができるように腰の横のところで紐で縛るタイプのものとなっている。

「……早くしろ」

ヴァネッサの声が僅かに上ずっている。三人の女たちが揃って下半身を剥き出しにする様は、女のヴァネッサの目から見ても壮観であつたらう。強いられた女囚たちはゆっくりと股間を守る最後の一枚、薄衣の一枚を脱ぎ捨てていく。ポーラの股間が、マレーネの尻

肉が、リディアの太股の付け根が次々に露となった。

星の石の明かりが女たちの肌を妖しく淫らに照らし出す。

荘厳な光景であつた。

神聖な女の股間。三人の女たちはその個性が違つて、その下半身の風情も異なつていた。三人の女囚は脱走や抵抗を防ぐ意味から武器となるものを一切与えられておらず、その中には剃刀も含まれていて、そのために、捜索隊に編入されて以後、女たちは一度として股間の無駄毛の手入れをしていなかった。

「これでいいでしょう……」

ポーラが苦しげに言つた。成熟した美女の股間に生える恥毛の色は暗い栗色。女のデルタは横幅が広く、へその下から割れ目の上、土手回り、尻の穴にまで硬い縮れ毛で覆われている。

「ぬ、脱いだわ……」

マレーネが屈辱にまつげを震わせて言つた。マレーネの股間の密林はポーラのものほど広さはないが、その代わりに陰毛の一本一本が太く、色の白い肌によく映えていた。手入れをまったく許されなかつたマレーネの股間もポーラ同様、泉の回りの肉土手から肛門に至るまでびっしりと縮れ毛が生えている。

「くうう……」

リディアも無防備な裸の股間を晒している。搜索隊に入ってからのおち、もつともその肉体に変化を見せたのがリディアであった。少女はフィオとの休みないセックスにより、青い果実を大いに成熟させようとしていたのだ。深い茶色をした、股の間のデルタは濃さと広さを増し、牝の匂いを強く発するようになっていた。女囚たちはついに三人が三人とも、もつとも破廉恥でもつとも弱く敏感な部位を晒すことになった。恥じらう女たちを見ながらヴァネッサは言った。

「トロッコに乗るんだ。早く！」

邪悪な女射手に追い立てられて、哀れな牝奴隷たちはレールの上の四輪車に上がった。トロッコの上は窮屈で、搜索隊の五人がぎりぎりいっぱいのリミットで乗ることができるぐらいのものである。股間の神聖な秘部を剥き出しにしたままの女たちは、トロッコの上で所在なさそうな顔をしている。トロッコを股で押す女の数は三人。どうしてもあと一人が足りない。あと一人。最後の一人がまだ股間を剥き出しにしていけないのだ。

ポーラも、マレーネもリディアもそしてフィオもヴァネッサのことをじっと見つめている。

——やっぱり無理なんでしょう。

囚人たちは白けてしまっている。横暴で傲岸で誇り高い女射手に、下半身のもつとも恥ずかしい部分を丸出しにして、あまつさえその柔らかい局部をシーソーに擦りつけるよう

な破廉恥な行為ができるわけがない。囚人たちはヴァネッサの限界を見切っていた。

囚人たち、セックスに狂った肉の奴隷と馬鹿にしていた唾棄すべき低劣な畜生と肩を並べて、剥き出しの股にシーソーを食い込ませる――。

ヴァネッサはもちろんまだそのような行為に強いためらいを感じている。だが。それをしなければ先には進めないのだ。それだけではない。ヴァネッサは奥歯を鳴らした。恥知らずな仕掛けもさることながら、女射手を苛立たせるのが囚人たちの哀れみ半分侮り半分の醒めた視線であった。

――畜生。畜生……。

ヴァネッサは覚悟を決めると腰を覆う長い腰布に手をかけた。腰布の下に女射手が穿くのは丈の短いパンツである。女射手は屈辱に耐えながら一番弱い女の局所を守る鎧を一枚ずつ脱ぎ捨てていく。腰布に続いて丈の短いパンツが投げ捨てられ、女はついに下着一枚になった。見事な下半身であった。フィオも、そして女囚たちもよく鍛えられた筋肉質な美獣の尻の肉に驚きの視線を送っている。

浅黒い肌。引き締まった尻の肉。両腿の間には肌の黒さによく似合う黒いショーツが一枚。小ぶりな下着は尻の割れ目にきりりと食い込んでいる。

「み、見るな……」

ヴァネッサは恥辱に溺れながら苦しげに言った。

「見るんじゃない……」

女射手は言ったが、女囚たちもフィオもその言葉に従わなかった。下半身を守る布切れさえなければ、傲慢なヴァネッサもただの女でしかない。ただの女であれば、股間の敏感な割れ目を刺激された時に肉体が見せる反応も普通の女と同じものでしかないのだ。

「う、うう……」

女射手はおそらく、この時の強制脱衣のことを一生涯忘れることはできないだろう。野性的な女は呻きながら最後の一枚、黒いショーツを、彼女が蔑んでいた肉の奴隷たちの前に開陳した。ショーツがはらりと地面に落ち、少年も、そして女囚たちも、足の長い筋肉質な女射手の生まれたままの見事な股間に息を呑んだ。ヴァネッサの股間はまるで黒光りする石炭のような濃く長い恥毛によって覆われていた。手入れもほとんどさされておらず、その様子は原始の森のようであった。あまりにも濃い股間のデルタは女の弱い股の間をびっしりと埋め尽くしており、尻穴の筋肉の回りにまでほつれた毛の森は続いている。

「い、行くぞ……」

今や自らも恥ずかしい肉の奴隷への一步を踏み出した若い射手が自らを奮い立たせて言った。もう先に進むしかないのだ。

「おまえも早く乗れ！」

ヴァネッサはトロッコの上でフィオを怒鳴りつけた。だが、女射手の威勢のよさも、少



年の何気ない視線の前に尻すぼみになってしまった。

——み、見ないでくれ……。

男の視線を股間に強く意識したヴァネッサは思ったように力を出すことができない。腰砕けのヴァネッサは囚人たちが初めて聞くようなぼそぼそとした情けない声で続ける。

「早く、てこの上に……」

トロッコの上には長いシーソーが一台。手押しならぬ股押しのでこ。女たちの股の位置すれすれのところに意地悪く、かつ絶妙のバランスで配された木製のでこの上には淫欲を煽るための無慈悲なイボが見える。下半身を丸裸にした女たちは仕方なく、てこの上にゆっくりとまたがった。シーソーの前方にはヴァネッサとリディアが、後方にはポーラとマレーネが乗ることになった。

「う、うう……」

剥き出しの股間を木製のでこの上に投げ出したポーラが苦しそうな声を上げた。ポーラだけではない。マレーネもリディアも悲しく鼻を鳴らす。柔らかい女の淫肉、股間に香り高く咲き誇る三つの肉の華に木製のでこの尖った背の部分がぐぐつと食い込んでいく。

「あ、食い込む……」

マレーネがいやいやをするように首を激しく横に振った。

「ああ、フィオ、あそこに、ああ……」

まだトロッコは一寸も進んでいないというのに、リディアも苦悶の表情を浮かべている。「か、感じる……」

ポーラが大事な秘所、血の繋がらない甥っ子の肉鉢だけに遊ぶことを許した柔らかい粘膜を何とかして守ろうと必死の形相で爪先立ちになっている。だが、彼女の努力もあまり意味のないものであった。女たちはいずれねつとりとしたいやらしい罨に股間を刺激され、自分の女としての性を呪い、また自分が女であることに満たされることになるのだ。

「みんな、耐えて……」

情けないことであるが、少年は女たちを応援することしかできない。女たちの恥知らずな努力を見届け、彼女たちの子宮の中で燃える女の業火の火勢がひどくなった時には、少年の肉槍で彼女たちの身体を慰める。それだけが少年のできることであった。フィオもそして彼が自慢にする熟れた妻たちも不幸であったが、それでもまだましであったかもしれない。彼女たちはクレイホーン男爵による無慈悲で恥知らずなセックス拷問を骨髄まで刷り込まれており、恥辱を喜びとする破廉恥な術を体得していたのだ。唯一ヴァネッサだけがそのような精神的な余裕を持ち合わせていなかった。

同僚の安否に対する不安。一緒にいながら仲間は一人もいないという孤独。自決したくなるほどの激しい恥辱。そして股間を蝕み始めているむずがゆい奇妙な快感。ヴァネッサはシーソーの上に股を開いて座った時からすでに限界寸前となっていた。

——ああ、何だか股の間が、股の間が……。

ヴァネッサの剥き出しのアワビにもシーソーは容赦なく食い込んでいる。しかも、女のまたがり方があまりにも素直であったためであろう。イボの部分がじかに、しかも無理のない形でヴァネッサの陰毛の陰に隠れた女陰の先端に食い込んでいた。

——あ、あ、あ……。

浅黒い肌の女は頭の中が真っ白になっている。

——食い込みが、食い込みが……。

ヴァネッサは自分の性についてそれほど頓着したことがない。アレックスのようにわざと自分の汚れた部位に目を背けていたわけではない。そうではなくてヴァネッサはただ単に幼稚な人物であったのだ。子供がそのまま大人になったような人物。性に対しても最初から興味が持てない、そんな人物であった。性の恐ろしさ、快感の素晴らしさをよく分かっているからこそ、彼女はトロッコの罍の凶悪さを正確に理解していなかったのだ。

——ど、どうなっているんだ、あ、あ、あ……。

自分の濃すぎる陰毛の下で何かが起こっている。何か。それを知ることがヴァネッサには恐ろしく、そしてためらわれることであった。

——待て、ちょっと……。

引き締まった肉体を持つ女射手の眉間に深い皺が刻まれ、そしてその唇が半開きになっ

ている。ヴァネッサは明らかに破廉恥な畏に快感を感じていた。そんな自分の肉体の変化にヴァネッサは混乱している。浅黒い肌をした女は何としても状況を理解し、立ち直るだけの時間が欲しかったのだ。そして、もしも女射手がそのことを素直に語れば、フィオも他の女たちもヴァネッサに時間を与えたはずであった。囚人たちは女射手にいつも意地悪をされていたが、それでもヴァネッサに興味返しをするほど邪悪ではなかったのだから。だが初めての快感に混乱しきったヴァネッサにはついに『待って』という一言を言うことができなかった。そして、そのために悲しく、恥ずかしい結果がヴァネッサの浅黒い肉体に訪れることになった。

「い、行きましょう……」

ポーラの音頭を受けて、女囚たちが心の一つにして膝を曲げ伸ばしする。シーソーの尖った峰が四つのアワビに絶妙のバランスで、それだからこそ無慈悲に食い込む。シーソーの動く幅はきわめて薄く、上下運動で僅かに拳一個あるかないか。しかし、それだけの作用でトロッコはまるで海を行く帆船のように何の摩擦もなくすーっと滑り始める。

ぎっぎっぎっ……。

木製のてこがきしみ、四者四様のアワビが甘く切なく刺激される。

「あっあっ……」

リディアが牝犬のようにみっともなく鳴いた。力を入れてシーソーを押す女たちの股間

にも刺激が来るが、それはシーソーの反対側の座る女たちも同じであった。下からぐぐつと持ち上がるイボのついた木のてこが女の因果な肉貝を無残にえぐるのだ。かくして左右のてこが揺れるたびに女の下半身にねっとりした甘美な苦痛が走るのだ。

「あつ、あつ、あうう」

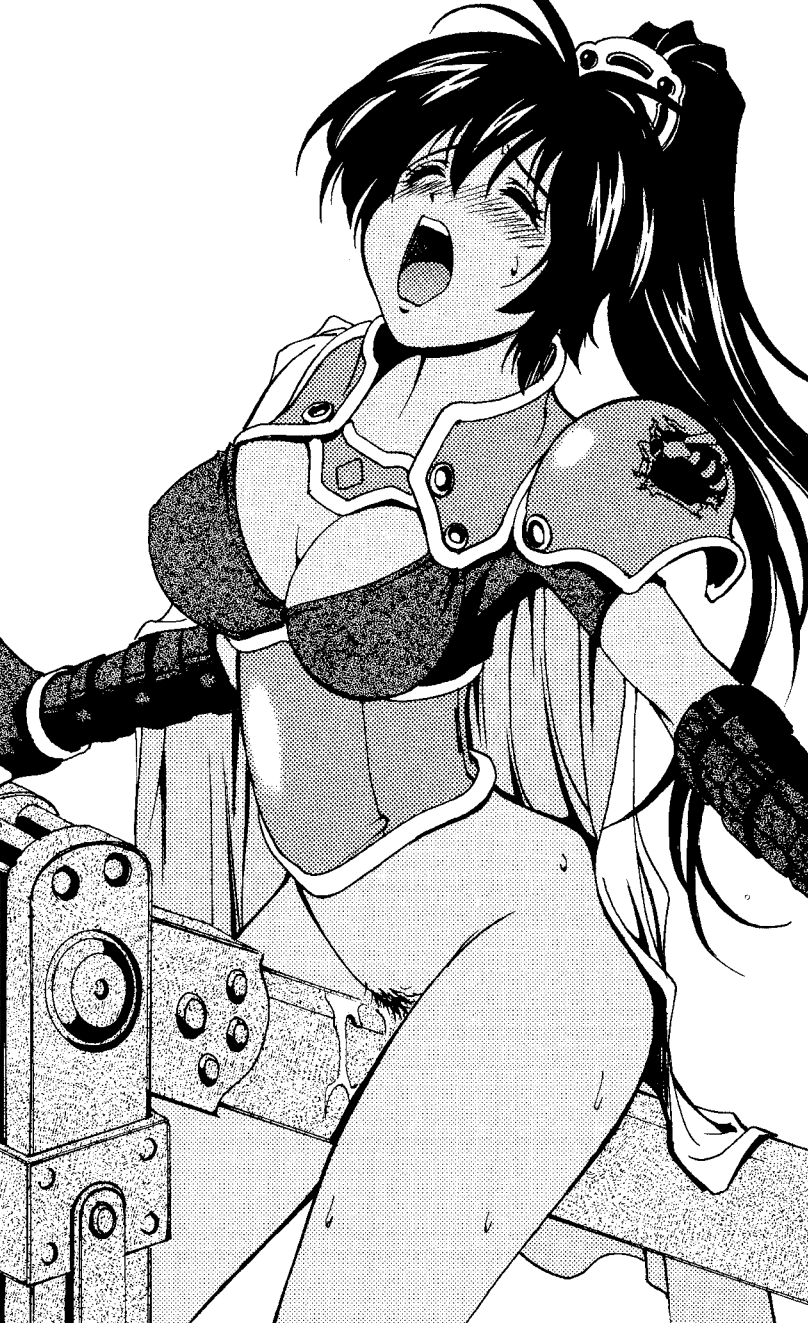
ヴァネッサがこらえきれなくなつてついに小さな嗚咽を漏らした。フィオの三人の妻たちが息を合わせててこを股で押す中、ヴァネッサだけがその波に乗れないでいた。ヴァネッサはいつ快感の波が来るかを感じとることができなかつたのだ。そのため、女射手の中心は他の女たちよりも余計に暖められることになつてしまつていた。

「あ、ああ……」

ヴァネッサは苦しそうに下唇を噛んだ。てこの脇で女たちを見ていたフィオは、ヴァネッサの変化を確認していた。浅黒い肌をした美しい女射手の全身が火照つているのが少年の目にも分かつた。そして、少年は見た。ヴァネッサの真つ黒い陰毛の森の中央に何か光るものがあつた。白い光。少年はヴァネッサの股間を凝視する。女はすでに夢見心地であり、少年のぶしつけな眼差しに怒りもしなかつた。

——愛液……。

ヴァネッサは早くも股間の刺激に愛液を噴出させていた。白い光は女の割れ目が流した悲しい涙であつたのだ。



——美しい……。

少年はヴァネッサのことが好きになれなかったが、快感に膣を熱くし、早くも白いエキスを漏らした女の下半身を美しいと感じていた。浅黒い肌に、黒い恥毛の森に真っ白いラブジュースの輝きはひどく淫ちに冴えていた。

「あ、あ、あ……」

黒い陰毛をねっとりとした本気汁で彩るヴァネッサは跳ね上がるてこを両手で押さえて、何とか恐ろしい運命の一撃を逃れようと試みる。トロッコは速度をぐんぐん上げていく。下半身を素っ裸にした女たちはかくかくと膝を曲げ伸ばしして股押しのでこを押し続ける。

「あ、あーっ」

ポーラが鳴いた。フィオの若い叔母のいびつな形をした肉貝も刺激をもらって急速に女蜜を溢れさせている。透明でさらさらしたポーラの恥ずかしいエキスは股間への刺激が長く引くにつれて濃厚なヨーグルト状のそれへと変わっていく。マレーネの下半身も少しずつ暖まり始めている。

「ああ、ああーっ、はーっ！」

白い肌をしたマレーネもまたこらえきれずに叫んだ。柔らかい秘肉を木製のシーソーがぐいぐいと食い込み、何ともいえない甘い刺激にマレーネの膣も歓喜の涙を流す。

「うっ、うひい……」

リディアの可憐なヒナギクも颯々するような突き上げに肉襷を充血させる。少女は園を食いしばり、両手をシーソーの上に置いて一心不乱に膝を屈伸させる。

かくかく……

四人の女たちはトロッコの上で恥知らずにも下半身を剥き出しにしたまま、柔らかい肉華をこの上に押しつけ、両足があるいは伸ばし、あるいは曲げる。女たちの破廉恥な努力により推力をもらったトロッコは石のレールの上を軽やかに疾走する。

「あっ、あっ……」

ポーラの唇が苦しそうなため息を漏らせば、マレーネも女の性を嘆くように鳴く。

「はああっ、あーっ！」

リディアも股間に集中する自重に必死に耐えている。

「くううっ……」

剥き出しの下半身が焦がされ、汗が女たちの肌をまばゆく美しく輝かせる。

ぬああ……

女たちの感じやすい姫貝が流すねっとりとした白いエキスがシーソーの股が当たる部分の四カ所に染み出し、濡らしていく。

「はああ、ああ、あーっ」

マレーネは叫んだ。白い肌の美女の額には汗で黒髪が二、三本張りついている。

「……ど、どこまで続いているのよーっ」

ポーラがむせび泣くように言った。レールは地中をどこまでも水平に続いている。いったいどこまで股押しのをこを押し続けなければならないのか。女たちの膝に疲労はまだない。トロッコのてこはきわめて精巧にかつ軽く作られており、女たちはそれこそいくらでも股間を押しつけて走り続けることができたはずである。ただ。軽快なトロッコには一つだけ構造的な問題があった。それは……。

「あ、あ、気持ちいい、気持ちいいよーっ」

一番幼く青いリディアがつらそうに喚いた。少女の顔はほとんど泣きそうになっている。幼なじみで夫でもある少年の前であられもない姿を披露することは少女にとってはたまらない快感であったのだ。

「が、がんばって、リディアちゃん……」

マレーネが仲間を励ます。

トロッコの問題。それは乗り手の肉体がいつまでも耐えられるものではないという点にあった。一番敏感な部分を絶妙な力で圧迫された女がどのような結末を見るかはこれは明らかであった。実際、トロッコの上で股でシーソーを押す女たちが一番恐れていたことが起こってしまった。

頂点。腔内でとぐろを巻いていた白い欲望が弾ける臨界――。

我慢しきれなかったのはヴァネッサであった。

——あ、あ、何か、何かが出そう……。

浅黒い肌をした射手は快感の極北へ到達する感覚を『出そう』と表現したが、それは普通の女性にとつては『いく』という感覚とまったく同質のものであった。

「うう、うっ」

両膝で円を描くように膝を曲げ伸ばししていた女射手が奇妙な呻き声を上げた。女の真っ黒い恥毛の森はすでに一見して分かるほどに大量の白い牝汁で汚れきっている。股間から激しく噴出する膣汁は女の浅黒い内股を濡らし、シーソーの背の部分をてらてらと光らせている。

「くうう、くーっ！」

ヴァネッサは小鼻を膨らませ、何とかして自分の下半身の内側から染み出してくる甘く酸っぱい感覚を抑えようと努力をする。

——ああ、駄目だ、駄目だ、駄目だ……。

眉間に皺を寄せ固く目を閉じ、歯を食いしばる。

「んふー、んふー、んふー……」

ヴァネッサはみつともなく鼻を鳴らす。女は自分の姿がどれほど破廉恥であるか、同時にどれほど気高く美しいか気がついていない。そして。

「あ、あ、あ……」

ヴァネッサは小刻みに身体を震わせた。無慈悲な神の祝福が牝獣の頭の上に降りてくる瞬間であった。その瞬間、ヴァネッサは両手でシーソーを押さえて、天空への飛翔を拒もうとした。ヴァネッサは神殿の教義に精通しているわけではないし、また、同僚のアレックスほど禁欲的な性分でもない。その彼女が性に対して嫌悪とまではいかないまでも不信感を持っているのは、彼女のただ単に男っぽい脳が、自分を女として認識するのを恐れていたからではないか。もつとも、ヴァネッサが自分をどう捉えようと股間への運命の痛打には何の意味も持っていないかった。一糸まとわぬヴァネッサの下半身、股の間に咲く淫華は度重なる酷い刺激のせいでもはや一秒も我慢することができなかつたのだ。

「うっ、うおおっ！」

シーソーの上でヴァネッサが反り返った。トンネルの中に女の叫びがいんいんと響いた。女の子宮内に大きな渦潮が逆巻き、そのあまりの激しい快感にヴァネッサは我を忘れて咆哮する。

「おっ——」

長く叫んだヴァネッサの身体が、硬直し、次の瞬間その全身から力のすべてが抜けてしまった。それが浅黒い肌をした女射手の頂上であった。哀れな囚人たちをいじめ、苦しめてきたヴァネッサが自分の女の部分に激しいしっぺ返しをもらった瞬間であつたのだ。ヴァ

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>